

宮崎市定の中国史像の形成と世界史構想

呂 超

Miyazaki Ichisada's Image of Chinese history and his concept of world history

LU Chao

As is well known, Miyazaki Ichisada (1901–1995) is one of the preeminent Japanese postwar scholars in the field of Chinese history, but his research interests did not stop there; he left a scholarly legacy that includes wide-ranging research on East-West relations and the history of Asia. Moreover, Miyazaki grasped history with the long view of a generalist, and argued that Chinese history should be studied from a world-historical perspective rather than being confined to the framework of a single nation. On the other hand, Miyazaki is well known for having been the first in Japanese academic circles to emphasize the existence of the historical phenomenon of the city-state in ancient China. This paper investigates a number of papers by Miyazaki which treat of his theory of city-states, and after examining the view of ancient Chinese history which he constructed, clarifies the relationship between his concept of world history and his theoretical approach to China's ancient city-states. It also traces the formative process of Miyazaki's conception of world history, analyzing its structure in the context of the social ideologies of the time, and elucidating the nature and characteristics of his philosophy of world history.

キーワード：宮崎市定 (Miyazaki Ichisada)、都市国家 (City-state)、世界史構想 (Global Historical Thought)

はじめに

周知のように、宮崎市定（1901-1995）は戦後日本の中国史研究を代表する研究者であり、その視野は単に中国史のみにとどまらず、東西交渉史やアジア史にまで及ぶ広汎な研究分野に及んだ。単にそれのみではなく、宮崎は長期的な感覚により歴史を捉えており、一国史の枠組みを超えた世界史の視野で中国史を研究すべきであると主張した。一方、よく知られているように、日本の学界においては、最初に中国古代に「都市国家」という歴史的現象が存在することを主張したのは宮崎である。同じく京大出身である宮崎の後輩の貝塚茂樹氏（1904-1987）も、この点では宮崎に同意している。この両氏の中国古代の「都市国家論」を取り上げて学術史的比較考察を行ったのは太田秀通である¹⁾。太田は「都市」と「国家」の西洋史における元来の意味を検討し、両氏の主張する中国都市国家論は、その二つの概念を明確にしていまいと指摘している。

中国側の研究では、王彦輝氏は秦漢時代の文献にあった「聚」や「聚落」などの語彙が有する意味と現代考古学における「聚落」の意味とが一致しないと主張し、ギリシャの都市国家の諸指標をもって宮崎の持論を学術的に考察し、宮崎の都市国家論が成立しないという結論に達した²⁾。しかしながら、王氏の論文において取り上げられた宮崎の論文は、「中国における聚落形体の変遷について一邑・国と郷・亭と村とに対する考察一」のみであり、宮崎の他の古代都市国家論を扱う論文³⁾には全く触れていない。

本論においては、宮崎の都市国家論を扱った他の論文を合わせて考察し、宮崎が構築した中国古代史像を検討したうえ、彼の世界史構想と彼の中国史古代史都市国家論との関わりを明らかにする。また、宮崎における世界史構想の形成過程をたどり、その構造を当時の社会的イデオロギーと結びつけて分析し、その上で、宮崎の世界史構想の特徴と本質とを捉えていく。

1) 太田秀通「日本における中国古代都市国家論の検討―貝塚茂樹・宮崎市定両氏の所論に関して―」、『中国古代史と歴史認識』、名著刊行会、2006年。

2) 王彦輝「早期国家理論與秦漢聚落形態研究―兼議宮崎市定的「中国都市国家論」―」、『中国社会科学』、2014年第6号。

3) 宮崎市定の中国都市国家論を論じた論文は多数存在する。例として「中国城郭の起源異説」（『歴史と地理』第32巻第3号、1933年）、「遊侠に就て」（『歴史と地理』第34巻第4・5号、1934年）、「中国古代史概論」（『ハーバード・燕京・同志社東方文化講座』8所収、1955年）、「中国上代は封建制か都市国家か」（『史林』第33巻第2号、1950年）、「中国における聚落形体の変遷について一邑・国と郷・亭と村とに対する考察一」（『大谷史学』第6号、1957年）、「戦国時代の都市」（『東方学会創立十五周年記念東方学論集』、1962年）、「漢代の里制と唐代の坊制」（『東洋史研究』第21巻第3号、1962年）などの論文が挙げられる。

1 宮崎の中国古代都市国家論と古代発展図式の成立

先にふれたように宮崎は中国古代において、西洋史上の都市国家と類似した歴史的現象が存在したと主張する。しかし、そこにはまず宮崎に西洋史上の都市国家に対する認識があつてはじめてそれが可能になるという前提がある。彼に都市国家の認識を与えたのは、坂口昂の『世界における希臘文明の潮流』という著書であると思われる。

坂口昂（1872-1928）は1907年に助教授として京大へ就任し、1912年に教授に任命され、その後1928年に逝去するまでずっと京大で西洋史の授業を担当した。坂口は、「普通講義として西洋史概説を講ずるとともに、特殊講義としてはヘレニズムを中心とする古代史、神聖ローマ帝国史、ルネサンス時代史などと各方面にわたって講じ、晩年にはもつばら十九世紀ドイツ史学史の研究に力を尽くした⁴⁾とされる。また坂口は東京帝国大学出身であり、日本近代史学へ甚大な影響を与えたランケの弟子リースに学び、「それは教授の学風にほとんど決定的な影響を與え」、「個別研究がつねに世界史的視野において展望⁵⁾すると考える。坂口が1912年に、「古代史研究の発展について」という講演を行い、「古代史研究が啓蒙期の学問的段階からニブールの史料批判を経て科学的研究に転じ、その対象がローマ史・ギリシヤ史のみならず、古代東方全体にまで拡大したこと、この古代史研究の発展によって、古代世界がすでに大きな国際関係を形成していたことが明証されると論じた。それは近世における古代史の発展を跡づけながら、古代史を古代的世界的連関において捉えようとする主張にほかならない」とする⁶⁾。坂口昂の『世界における希臘文明の潮流』という著書は、まさにそのような古代史の世界史観に基づくものである。当該著書は、宮崎の古代史観に影響を与えたと思われる。両氏は世界史の視野を取り入れた上で個別研究を行う点において共通している。

坂口昂は、「都市国家とは希臘語の都市（ポーリス）polisの意識」とし、「我国の歴史及び現状に照らしては、希臘の都市国家の概念を得ること、頗る困難である。しかし、人若ししばらく歐洲諸国を逍遙したならば、諸国の多くの都市に於いて、今尚旧時の独立国家の面影を看取し、従つて幾分か希臘の都市国家を髣髴することができよう⁷⁾」と論じており、彼は、それについて以下のような説明を加えた。

4) 『京都大学文学部五十年史』、京都大学文学部、1956年、171頁。

5) 前掲『京都大学文学部五十年史』、171-172頁。

6) 前掲『京都大学文学部五十年史』、172頁。

7) 坂口昂『世界における希臘文明の潮流』、岩波書店、1924年、25-26頁。

南伊の東海岸では、バーリ Bari からルーヴォ Ruvo まで、その西海岸では、山紫水明なるナポリ湾頭、ナポリ市からホンペイの遺跡に到る迄、いづれも相当の間隔をおいて連続する都市群の状態は、古代の都市国家竝立の好適例である。之を総括して話すと、ナポリ市其ものは、現今古典希臘に見るべからざる大都市となって居るから例外とし、其他の市は、概して人口一萬乃至六七萬、汽車で二里か三里か旅行する毎に、その一つが存在して繁昌して居る。是等の市と市との間に介在する丘陵田畑には、橄欖繁茂し、葡萄実り、豆麦秀でて居るが、その間に、労働者の住む少数なる小屋の他は、何等の定住的村落は一だも見当たらない。然らば農業者はいづくに住するか。彼等は各自の市の中に定住して居る。人若し早朝又は夕暮れにこれらの地方の国道を旅行せんか、そこに農夫等が馬車を駆り、車上農具等を積載し、群を成して、朝は市から出、夕は市の方へ帰りゆくに遭遇するであらう。是等の地方に市が多数に散在すること、及び各市の人口が比較的多数なることは、主として商工業者の人口に因るのではない。是等の現象の最大原因は農業者の殆ど全部が、各自の耕作する田畑から可なり遠く離れて、是等の市に住居して居るに在るのである。蓋し南欧の地主及び農民は、都市住居を生活の必要と感じ、一日も之を缺く能はず、夕には必ず戸外に出で、その住居する市相当の御定りの散歩路を逍遙し、平生出入のカフェー店頭で朋友隣人等と談笑嬉遊し、是等の行動の間に、彼等相応の所謂途上の政治運動を行ふを常とする。⁸⁾

宮崎は以上の文章を引用し、都市国家の実態を検討する時の「最もよい参考」⁹⁾であると主張した。さらに、坂口は以上のヨーロッパの現状に基づいて、古代都市国家の実態を組み立て、この著書において都市国家の実態を以下のように説明している。

海岸を少しく内地に入り、而も餘り遠くないところ、即ち海賊から直接襲掠されない、而も海上交通の便を有する傍り、橄欖繁茂せる平野の中央、若しくはその一隅、水利の便あしからず、必ず小高き阜又は山を中心としてその四周を環り、若くば之を背後に負うてその麓を縫ひて、多数の民族群り建ち、その人口数千から数萬に至る。山上の部分は高市（アクロポリス）と称し、ここに市の保護神、例へばアテネ（ミネルヴァ）、若しくはアポロンを祭れる列柱方形の神殿（バシリカ）がある。市の宝庫も亦たここにある。この高市（ア

8) 前掲『世界における希臘文明の潮流』、27-28頁。

9) 宮崎市定「中国における聚落形体の変遷について一邑・国と郷・亭と村とに対する考察一」、『中国古代史論』、平凡社、1988年、81頁。

クロポリス)は市即ち国家の最も神聖なる霊場で、同時に一朝事ある時は国家の城郭となる。随つて嚴重に城壁を環らす。¹⁰⁾

宮崎は1933年に「中国城郭の起源異説」という論文を発表し、その論文において中国古代の城郭の変遷を考察し、それをギリシャと比較して、中国古代にも都市国家が存在したということをもまだ明確には言明していない段階であった。後にやがて「吾人は之を希臘・羅馬など西洋の城郭の発達に比較して非常に共通な点の多い所に無限の興味を感じる」という結論に到達した。さらにギリシャの都市の発展について次のように論じている。

古典時代の希臘の諸国は概ね堅固な城壁を以て囲まれているが、其町の中心に高市（アクロポリス）と称する小丘があって、神殿や金庫が此上にあつたが、元来は先ず高市が王の住居として発達し、敵襲の際人民は皆此中に立籠つたものであつた。町の周囲の城壁は後に発達したもので、波斯戦争当時のアテネ人の中は猶高市によって波斯を防ぐことを唱えた者があつた。¹¹⁾

これらの記載から、坂口、宮崎両氏の論述において共通する部分を見いだすことができよう。すなわち宮崎は、坂口の古代ギリシャの都市国家論に対する論説を中国古代史に適用したのである。宮崎は「大正十二年、大学二回生になり、専攻学科を東洋史に定めた際、すぐこまட்டのは、読む本が何もないことであつた」と回想し、東洋史のその状況に対し、西洋史の分野においては、「坂口昂『世界における希臘文明の潮流』などは、高度な内容でありながら、誰にも分るよう書かれている¹²⁾と激賞した。さらに古代の聚落の形態の変遷を論じる時に、「これについて坂口昂博士『世界における希臘文明の潮流』の中においてなされた説明を私は感動的に受けた¹³⁾と表明した。これは、前にもふれた通り1957年に発表された宮崎市定の「中国における聚落形体の変遷について一邑・国と郷・亭と村とに対する考察一」という論文における言説である¹⁴⁾。要するに、宮崎が中国古代史上に都市国家の現象を求める時に使われた西洋史の

10) 前掲『世界における希臘文明の潮流』、28-29頁。

11) 宮崎市定「中国城郭の起源異説」（『歴史と地理』第32巻第3号）、前掲『中国古代史論』所収、52-53頁。

12) 宮崎市定「私の中国古代史研究歴」（1985）、前掲『中国古代史論』所収、310頁。

13) 前掲宮崎市定「私の中国古代史研究歴」319頁。

14) 宮崎市定「中国における聚落形体の変遷について一邑・国と郷・亭と村とに対する考察一」、『中国古代史論』、平凡社、1988年、81頁。

基準とは、坂口の論説を指すと言ってよいであろう。

しかし、宮崎が坂口から得たヒントはあくまでも西洋の都市国家についての認識であり、それに類似した現象を中国古代史に見いだせても、すぐには宮崎の主張する古代史の図式通りとはならない。1934年11月に刊行された宮崎の「遊侠に就て」という論文において、彼は初めて中国古代において都市国家の現象が存在したことを言明し、その上、古代史は都市国家から領土国家を経て大帝国へと発展していく過程であると規定した。宮崎によれば、古代史の発展図式は以下のように展開する。

余の意見では、中国の古代は小さな都市国家、乃至は部落国家の対立せる社会であった。黄河の沿岸の比較的狭小なる地域に兎も角多数の独立的なる都市国家、若しくは部落国家の存在したる記憶であろうが、してみればその国家の大きさも亦従って甚だしく限定されたものであったであろう。但し此等諸国は後世の所謂封建制度の如き統一がなかったとは云え、必ずしも散沙の如く無統制に割拠したとは考えられない。必ずや血族的、或は地域的の縁故によって或種の同盟を形成し、その中心となるは比較的有力な国家であって、之が同盟の条約実施を監督するが如き地位に立ち、小加盟国に対して相当の圧力を有したであろう。而して長き従属関係はやがて合併・併呑を生じ、弱肉強食、一面より見れば大同団結の傾向を生じ、諸国の数が減少すると共に、大なる強国を発生する。斯かる強国間に再び同盟、合併が行われて結局中国全国統一に導かれるのが春秋・戦国時代の大勢である。¹⁵⁾

これよりわかるように、宮崎は中国における春秋から戦国への歴史発展段階を都市国家間の「弱肉強食」から統一された領土国家を経て、大帝国へと統合する過程として捉えている。これは、ギリシャにおけるポリス社会の成立、崩壊からローマ大帝国に統一された歴史を想起させる。この論文において、宮崎は「都市国家」というヨーロッパ史から類型化された概念を中国史に適用した。

ただし、ここで注意しなければならないのは、宮崎が前述の1933年に発表された「中国城郭の起源異説」という論文において、「吾人は之を希臘・羅馬など西洋の城郭の発達に比較して非

15) 宮崎市定「遊侠に就て」、『歴史と地理』第34巻第4・5号「故内藤湖南博士追憶記念論文集」、1934年、42-43頁。この論文の末尾に、「昭和九年八月二十二日改稿了」と書いてあり、時間的に見れば中原與茂九郎氏の著書の刊行時間より早かった。

常に共通な点の多い所に無限の興味を感じる」¹⁶⁾と述べていることである。つまり、1933年の時点では、中国古代とギリシャとを比較して両方には類似的現象があると気づいた宮崎は、まだ明確に「都市国家」という語彙を使用せず、それに、それを使って古代史の発展図式を構築することもなかった。

この論文の最後に「附記」が付けられて、「この稿を草するに当り先輩那波学士¹⁷⁾の研究、「支那都邑の城郭と其の起原」(史林第十卷第二号) 其他の名篇よりヒントを得たる事多し。此に記して謝意を表す」¹⁸⁾と記されており、「其他の名篇」には、前述の坂口昂の『世界における希臘文明の潮流』が含まれるであろう。それはともかく翌年の1934年に、宮崎が明確に「都市国家」という言葉を使用したのみならず、中国古代史に「都市国家から領土国家を経て大帝国へ」という図式を打ち出したのは事実である。

また注意すべきは、宮崎の京大の同僚である西南アジア史の研究者の中原与茂九郎(1900-1988)の西アジア史の古代史発展に対する研究である。中原与茂九郎は宮崎より一歳年下であったが、宮崎と同様に1922年4月に京都帝国大学の史学科(西洋史)に入学し、1925年3月に京大を卒業した者であった。

中原は1928年12月から1930年1月にかけて2年間に及ぶオックスフォード大学での留学生活を送った。1951年に広島大学から京大へ転職した彼は、1963年に定年退官するまでずっと京大で勤めた。¹⁹⁾彼は、1952年に宮崎市定が中心編集メンバーになる『京大東洋史』の第5冊「西アジア・インド史」の編集者の一人であり、当該書の「第一部西アジア」の「第一章 古代東方時代」と「第二章 ヘレニズム時代」とを執筆した。加えて、中原は1956年に正式に発足した足利惇氏と宮崎市定とがそれぞれ正・副会長を務めた京都大学西南アジア研究会のメンバーであり²⁰⁾、同学会の機関誌『西南アジア研究』の顧問でもあった。中原と宮崎とは交流があったものと思われる。そして、1934年9月15日発行の岩波講座東洋思潮の一冊として刊行された『西南アジアの文化』において、中原与茂九郎は西アジアにおける古代史の発展を以下のように論じている。

16) 宮崎市定「中国城郭の起源異説」(『歴史と地理』第32巻第3号)、前掲『中国古代史論』、52頁。

17) 那波利貞(1890-1970)、東洋史学者、京都大学教授。

18) 前掲『中国古代史論』、55頁。

19) 「中原与茂九郎の略歴と主要著作目録」、『西南アジア研究』第10号、京都大学西南アジア研究会、1963年、ii頁。

20) 京都大学の西南アジア研究会の成立については、『西南アジア研究』第14号「宮崎市定教授退官記念」において、高林藤樹氏の説明がくわしい。『西南アジア研究』、第14号、1965年、121頁。

メソポタミア即チ 그리스・ユーフラテス両河流域地方に建国された国家の政権は西紀前四十世紀頃からの初期の都市国家時代より西紀前六―四世紀のペルシャ帝国時代に至るまで終始一貫して王政であつた。これを大づかみに概括すれば、歴史黎明期におけるシュメール・アッカド地方の諸都市国家間における覇権掌握のため抗争した都市国王、之に次いで、是等諸都市国家を統合した領土的国家的官僚政治による専制君主政体の樹立（サルゴンのアッカド王国）を見、やがてこれは一個の法治的商業的国家形態をとつた官僚的君主政体（法典編纂者ハンムラビの属するバビロン第一王朝）に変形し、つひに諸国民、諸民族を武力統一して世界統治を行はんとした軍国主義的帝国（アッシリア帝国、ペルシャ帝国）の出現を見るにいたつている。²¹⁾

この記述より、中原与茂九郎の西アジア史における都市国家から大帝国へという古代史の発展の図式は、宮崎が考える古代史の発展図式とほぼ同様であると考えられる。

1953年に出版された『京大東洋史』5「西アジア・インド史」における「第一章 古代東方時代」と「第二章 ヘレニズム時代」という部分を担当した中原与茂九郎は、上記の立場を基本的に継承しながらより詳細な論説を加えた。メソポタミアとエジプトにおいて、「ここに地上最初の都市国家が出現した」ことを強調し、「都市国家の成立」、「都市国家の崩壊」、「領土国家的成立」、「世界帝国の出現」と諸項目にわけて詳細に論じた²²⁾。中原の論説と宮崎の中国古代理論都市国家論に対する論説とは共通するところが多い。

あるいは宮崎の世界史構想は、中原与茂九郎「西南亜細亜の文化」からヒントを得たかもしれない。すなわち、まずヨーロッパの古代史との比較的視点から、中国古代理論にもギリシャと類似する現象が見られるという前提がある。そしてヨーロッパの古代史は分散する都市国家から統一的な大帝国へと発展してきたという図式が周知のことであり、中原与茂九郎が西アジアの古代にもそういう発展ルートを見出した主張と何らかの形で出会い、もし中国史にも類似的発展が見出せるならば、そういった三つの地域は何故に平行的な現象があったのかということが頭に浮かんだものと考えられる。このような問題意識は、宮崎の世界史構想の起点となったと言ってよいであろう。学問の基盤が中国史にあった宮崎が、西アジアの古代史にほとんど考察を加えずに直接そのような論を出してきたことには注意すべきであろう。

明確に「都市国家」という概念で中国古代理論を捉えた1934年から宮崎は、彼が提出した都市

21) 中原与茂九郎「西南亜細亜の文化」、岩波講座『東洋思潮』第8巻「東洋思潮の展開」、岩波書店、1934年、17頁。

22) 中原与茂九郎、羽田明他共著『京大東洋史』5「西アジア史・インド史」、創元社、1953年、2-27頁。

国家論古代史及びそれに基づく古代史の発展図式という枠組みの有効性を証明するために、諸々の細部の事実について考察を行った。このような学説は、その後彼の生涯を貫いた変わらぬ持論となったのである。例えば1950年に発表された「中国上代は封建制か都市国家か」という論文において「世界史と中国古代史」という項目があり、次のように論じている。

私の歴史観によれば、全世界の各地域における古代史の発展とは氏族的な小団結しかもたなかった人類が、次第に大きな団体に統合されて、最後に大帝國を現出するに至るまでの経路であると理解する。そして氏族制度から大帝國出現までの中間に都市国家なる段階が現れるのを普通とする。私の頭の中には、氏族制度—都市国家—領土国家—大帝國という一連の公式が潜在する。²³⁾

この論説を見てわかるように、この論説は、1934年時点の論調と比べるとほとんど変わらなかった一方で、全世界に適用できる普遍的古代史の発展図式を見つけようという姿勢を宮崎が取っているという意図がより明確に看取される。

また、前述の「中国における聚落形体の変遷について—邑・国と郷・亭と村とに対する考察—」（1957年）という論文において、宮崎は世界史を体系的に把握しようという意図を一層明確に吐露した。当時の日本学界において、都市国家のかわりに「邑制国家」を用いて中国上代の歴史を捉える論調に対して²⁴⁾、宮崎は批判的姿勢を示した。

ある学者は、既にヨーロッパのポリスを都市国家と訳した以上、これとは遠く離れた中国古代の城郭団体を、別の言葉で呼びたいという意見もある。併し私の立場から言えば、それでは意味がない。どうしても西と東を同じ言葉で読んでもらわなければ困るのである。それは決して私がこれ迄そうしてきたからという行きがかり上の理由で因業に執着するの

23) 宮崎市定「中国上代は封建制か都市国家か」、前掲『中国古代史論』、57頁。

24) 日本において、中江丑吉(1889-1942)が最初に「邑制国家」を使った学者であると思われる(1925年に、中江丑吉が北京に滞在中に刊行された『支那古代政治思想』において、「第五節 社会生活の状況」という一節があり、「邑土国家」という名称を使用した。また、この本の改定版が岩波書店によって出版され、『中国古代政治思想』(1950年)と改称された)。また、宮崎の当該論文が発表された1957年以前に、邑制国家というテーマを扱ったのは、主に以下の研究成果が挙げられる。松本光雄「中国古代の邑と民・人との関係」、『山梨大学学芸学部研究報告』三、1952年。松本光雄「中国古代社会における分邑と宗と賦について」、『山梨大学学芸学部研究報告』四、1953年。また、宇都宮清吉「古代帝國史概論」、『漢代社会経済史研究』、弘文堂、1955年。

ではない。²⁵⁾

宮崎はさらに言う。

もしも相似たる聚落形態において、都市国家と非都市国家の間に明確な線を引くならば、何故にそんな境界線が成立し得るかを私は反問したいと思う。私は都市国家なるものを、世界の古代史に共通な現象として、ギリシャの都市国家も、中国の都市国家も、その中の一環をなすものとして理解したいのである。(中略)そして都市国家なるものは、かかる古代帝国の前段階をなすものに外ならない。逆に言えば、中国古代史とは、都市国家的小聚落が無数に散在した上代から、次第にその中に中心国家が成長して国家連合を形造り、覇者が出現し、領土国家が形成されて、最後に古代帝国が成立するまでの過程であるとも言うことができる。²⁶⁾

中国古代史にも都市国家が存在すると主張した宮崎は、二つの地域の都市国家の実態には不一致点があることを認める。それでも彼は依然として都市国家という概念を使ったのは、中国古代史を世界史の「歩調」に合わせるためであると表明した。換言すれば、ヨーロッパや西アジア史に現れた現象を中国古代史上に求めているのである。宮崎の言葉を借りれば、すなわち次のようなものである。

現今の学界において、都市国家の代表的なモデルとされているのは、古代ギリシャのそれであるが、これと似通った国家形体は中近東の各地、更にはずっと東方のインド古代にも存在していたことが分かり、史家は一様にこれを都市国家と呼んでいる。私の考えによれば現実にその余波として中国にも都市国家が発生したのであって、これは大きな世界的な流れとして理解すべきものである。すなわち文明の古い地域においては、人類の部族的な血縁団体が次第に成長して、最後には古代帝国の大統一を形成する間に、一種の通過儀礼のように、殆んど必然的に都市国家の時代を経験しなければならなかった²⁷⁾。

25) 前掲「中国における聚落形体の変遷について―邑・国と郷・亭と村とに対する考察―」、108頁。

26) 宮崎市定「中国における聚落形体の変遷について―邑・国と郷・亭と村とに対する考察―」、『中国古代史論』、平凡社、1988年、108-109頁。

27) 宮崎市定『中国古代史論』、平凡社、1988年、まえがき。

「一種の通過儀礼」とあるように、宮崎の世界史のなかに発展法則を見つけようという意図が、ここで明確に表明されたと看取できる。

しかしながら、単に各地域において平行的現象があるのを考察するだけで、中世、近世における平行的現象を認識できないのでは、世界史を体系的に把握できない。もしも三つの地域において、古代・中世・近世ごとに類似した発展ルートを経過することが成立すれば、その背後に如何なる原因があったのか。これは宮崎の世界史構想につながる問題で、以下はこの問題を検討することとする。

2 宮崎の世界史構想—その形成と構造

第1章では、宮崎の中国古代都市国家論と世界史構想との関係を検討した。しかし、単に三つの地域の古代史の発展において平行現象が見られるのを究明するだけでは、同一の基盤となる世界史観が成立するとは言い難い。当時の学界において通説的な時代三区分法であった古代・中世・近世という三つの時期から、平行現象が見出されないということで、宮崎の世界史構想を補強するものではない。そういう関心をもって宮崎は1940、1941年に二回の連載で「西洋のルネッサンスと東洋のルネッサンス」という論文を発表し、初めて彼の世界史構想を明らかにしたのである。

宮崎が中国古代都市国家論を論証した意図は、世界の各地域において、平行現象を共有するのを論証し、中国史の発展を世界史のペースに合わせることにあった。中国史上に都市国家があったことを指摘した「遊侠に就て」が発表されたのは1934年であった。それから宮崎の学術的関心は、しばらく宋代史に集中した。その後1936年2月に神戸から出発し、二年間に及ぶ文部省の在外研究員としてフランスへ赴いたのである。

従って1936年2月から1938年8月に帰国するまでの間、宮崎には公刊された論文がほとんどなかった。ただ在欧期間において宮崎は彼が従来関心を持っていた西アジアへの大旅行を敢行した。この大旅行が、その前に既に芽生えた彼の世界史に対する構想に甚大な影響を与えたと思われる。ヨーロッパから帰国後、宮崎は「条支と大秦と西海」（1939年）などの東西交渉史の論文を発表したほかにも、「近世東西交渉史」（1939年）、「西亜細亜史概説」（1944年）の授業をも開設したのである²⁸⁾。このような経験が、彼の世界史構想を深化させる「内部要因」であろう。それまでの宮崎の世界史に対するそれらの考えが、当時の社会的・学術的思潮の刺激を受け、「東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」という論文に結実したのである。

28) 『京都大学文学部五十年史』、京都大学文学部、1956年、162-163頁。

この論文は、宮崎の世界各地の古代史は平行的発展をたどったという構想と関連しているものであり、彼は中国にもルネサンス現象の存在を力説し、西アジア、東アジア及びヨーロッパという三つの地域において、ルネサンス現象が継起的に発生したことを論証したのである。この論文の「緒論—三個の世界と三個の時代」において、宮崎はまず「過去数千年の人類の歴史を理解する為めに、必然の便宜上、縦には何期かの時代区分に分ち、横には之を幾個かの地域区分に分つことが要求される」²⁹⁾とし、日本における従来の「亜細亜」(東洋)と「欧羅巴」(西洋)という世界の二分法が不十分な方法であると指摘したうえ、さらに「亜細亜」を二分すべきであると主張した。すなわち、世界は「東亜細亜」、「西亜細亜」と「欧羅巴」という三つの地域からなるものである。

ここで注意すべきは、宮崎が行ったこの地域区分は地理的「地域」ではなくて、むしろ文化的にまとまった「地域」である「文化圏」ともいえるであろう。先にもふれたように、こういう三つの地域には、平行現象があるという予想を持っていた宮崎は、すでに古代史の発展において都市国家が必然的に通過しなければならぬ共通現象であることを論じた。この論文において、宮崎は中国の宋代を東洋のルネサンスとし、宋代以降は東洋の近世であると力説している。これは一般的に宮崎が内藤湖南の中国史の時代区分論の継承者とされる所以であろう。すでに指摘されたように、「湖南は宋代の中国をルネサンス期のヨーロッパと明確に比較したことはなかった。しかし、京都大学の宮崎市定教授と島田虔次教授は、この問題を正面から論じている。現に宮崎教授はルネサンス精神を敷衍し、それを歴史における「近世」性の中心的要素とみなしている」³⁰⁾とする。

日本の学界では、早い時期から明確に中国の宋代を近世の起点としたのが内田銀蔵³¹⁾であるというのはよく知られている。内田は1918年1月に、西村天囚³²⁾の要請により、懷徳堂記念会のため、「近世の日本」をテーマとした講演を行った。翌年富山房によって、講演集『近世の日本』が刊行された。

この講演において内田は「隋唐は政治上から言えば、前の南北分裂の時代と大いに趣きを異

29) 宮崎市定「東洋のルネサンスと西洋のルネサンス」(上)、『史林』第25巻第4号、1940年、1頁。「東洋のルネサンスと西洋のルネサンス」という論文は上、下二部からなっており、『史林』第25巻第4号(1940年11月)、第26巻第1号(1941年1月)二回連載された。のちに、『アジア史研究』第二巻所収、同朋社、1963年。『宮崎市定全集』第19巻所収。

30) J.A.フォーゲル著、井上裕正訳『内藤湖南—ポリティックスとシノロジー—』、平凡社、1989年、219頁。

31) 内田銀蔵(1872-1919)、日本経済史の先駆者であり、専門は日本近世史である。

32) 西村天囚(1865-1924)、大阪朝日新聞社の主筆、京都帝国大学の講師などを歴任。日本のジャーナリスト、漢学者。

にしておるが、文明の性質においては、前のまを受け継いでいる。しかるに宋に至ってはすこぶる新しき色彩が加わって、学問芸術一体の風気が何となく伝習的の拘束を脱し、軽く明るい新味を帯びてまいった。言い換えれば近世的になったのである。(中略)これ私が宋以後を以て支那歴史における近世といおうと欲する所以である」³³⁾と表明している。しかしながら、内藤湖南と同様に、西洋史の近世をモデルとして中国史を考えたが、中国史上にもルネサンス現象があったことを主張するに至らなかった。

宮崎の研究方法は、古代史の都市国家論を扱った時に使用された比較史の方法である。

最も顕著に現れ、同時にその内容が最もよく研究されているのは西洋史上に於いてであって、本来は単に西洋史を説明する為に用いられた言葉であるから、之を拡充して、東洋史上にも応用せんとする時には、勢い、西洋史上に現れるる現象を基本として、その類例を東洋史上に求むるような比較法を採らざるをえない。³⁴⁾

すなわちこれも、古代都市国家論の研究手法と同様に、西洋史から抽出された概念と類似した現象を中国史に求める方法である。しかしながら、このような比較方法を意識した宮崎は、「斯かる方法は飽くまで便宜的のものであって、東洋史の研究が更に進歩したる暁には、改めて東洋史上の事実を基礎としてその類例を西洋に求める底の比較法も可能」³⁵⁾であるという。つまり、西洋中心主義の史観に同調せず、東洋史研究者の主体性を確立すべきとの主張であるが、この段階ではあくまで西洋史をモデルとした類型化された現象を東洋史に求めるしかないという論調である。更に宮崎は、「哲学」、「文体」、「印刷術」、「科学の発達」と「芸術の発達」という五項目を分けて中国史上のルネサンス現象を西洋ルネサンスの諸現象と比較しながら詳論した。

このように、宮崎は西洋史から抽出されたルネサンスの指標で中国宋代の諸現象を考察したのである。それを通じて、宮崎は「之と殆ど平行の現象が、東洋に於いては、約三世紀前に経験済み」と指摘し、それは「吾人が東洋史を説くに当り、大体唐末宋初を以て、中世と近世の転換期とする」³⁶⁾理由でもあると論じた。しかしながら、三つの地域において類似している現象が見られるということを論証した宮崎には、もう一つ別の意図が伺える。つまり、平行現象が

33) 内田銀蔵著、宮崎道生校注『近世の日本・日本近世史』、平凡社、1975年、9頁。

34) 前掲宮崎市定「東洋のルネッサスと西洋のルネサンス」(上)、5-6頁。

35) 前掲宮崎市定「東洋のルネッサスと西洋のルネサンス」(上)、6頁。

36) 前掲宮崎市定「東洋のルネッサスと西洋のルネサンス」(上)、12頁。

あったとしても、必ずしもそれは共時性を有するものではないということである。

扱この三つの世界は大体に於いて、夫々相似たる社会的発展を遂げて来たのであるが、その時代区分は従来西洋史上に用いられ来た古代、中世、近世の三段階を其尽採用して支えないと思われる。但し三つの世界に於いて、古代より中世へ、中世より近世への転換期は必ずしも同時に起らない。概して云えばバルシャ・イスラム世界がその社会的成長が最も早く、東洋之に次ぎ、西洋が最も遅い。³⁷⁾

このように宮崎においては、この三つの「世界」における類似の現象がみられるものの、それは必ずしも「共時性」を有するわけではないとする。つまり、宮崎はすでに「王朝交替史」となりがちな中国の一国史の枠を超えた世界史の視野で中国史を把握するのみならず、複数の「文明圏」が存在するという構想によって世界史を構築することを試みた。

しかし、ここで注意すべきは、宮崎の世界史の構想は西アジア、東アジアとヨーロッパとの関係を考察して成立するもので、この三つの地域以外の広大な地域が対象外とされたことである。この点は、宮崎の「強国中心史観」の立場を表すものと考えられる。そしてもうひとつの問題がある。宮崎がいわゆる「世界史」の立場を取るのが、漠然として西洋史上にあった現象を東アジア史と西アジア史との西洋史以外の地域に求める比較史の方法を採用するという前提が含まれていることである。そうなると西洋中心主義の史観から抜け出すのは難しく、東アジアと西アジアとの両地域の自律性、特殊性を見落とす恐れがあると言えよう。

要するに宮崎は、中国史のみに拘泥する中国史研究者と異なり、一国史の枠を超えた世界史の視野を取り入れ、社会経済史や比較史の方法を使って中国史研究の新生面を切り開いたといえよう。このような三つの世界における平行的現象の存在が、宮崎の世界史観を支える柱となる。1940年以降、この世界史に対する宮崎の構想はたびたび論じられる。

これは、彼の学術姿勢を貫く特徴でもある。例えば、前述の『アジア史概説』の第四章「近世的ナショナリズムの潮流」において、「地域間の平行現象」という項目があり、それについて宮崎は、以下のように論じていた。

既に世界における各地域の独立性を一応認めながら、しかもその背後に人類全体としての世界史の機構を考へようとするならば、先づ第一に各地域間に於ける歴史発展の平行現象

37) 前掲宮崎市定「東洋のルネッサスと西洋のルネッサンス」(上)、2頁。

を予想しなければならぬ。而して吾人はアジア大陸に於いて、西アジアと極東と、及び附随的な印度との三地域が存在を認め、主として政治的統一の進行と、その後に来る分裂傾向との二つを以て、夫々古代史と中世史とを性格付けて来た。斯ういふ外形的な現象を以て時代の性格を説明することは、歴史の中に深奥な意味を探らうとする精神史観の立場から鋭い批判を受け易いものであることは云ふまでもない。併し乍ら歴史学を実証的な、観察的な学問たらしめるには、先づ何人も承認せざるを得ぬ外形的な事実を基礎として、凡てをそこから出発せしめなければならぬ。而して外面的な事象は決して其儘外面的な事象に止まるものでなく、それは大きな力と力が相働いた後に、その総決算として生じたものである。この力は民族や国家の智力、意志力の総和なるのみならず、それによつて動かされる土地の経済的資源といふ潜勢力をも含んでゐる。実は歴史上に存する地域そのものも、斯る力の働く場として生じたるものにほかならない。地域を形成した力は、即ち時代を形成した力なのである。³⁸⁾

すなわち、宮崎においては平行現象を見出すのがあくまでも彼の世界史構想のスタートであり、その背後にある原因を探らなければならない。宮崎がしばしば強調したのは、こういう平行的現象が同時に現れたのではなく、むしろ時間差があることを考えなければならないということである。その平行的発展という現象が、このような三つの地域の歴史上の交渉によるものであると宮崎はさらに指摘した。

併しながら一方、各地域の平行的社会発展を認めただけでは、各地域は互いに全く孤立して了つて、之を一つの世界史として認識するに困難を感ずるであらう。此処に於いて吾人は各地域の夫々の発展の裏に、内面的な関連の存在を予想しなければならぬ。云ひ換へれば後進地域の発展は、先進地域の発展に指導され、啓発されて実現したものでなければならぬのである。全人類の世界史を成立せしめる為には、各地域に発展する平行現象と、この平行現象の間に存する有機的な関連が前提とされなければならぬ。この前提を受け入れることが可能か否かによつて、世界史の成否も決定されるわけである³⁹⁾

これは宮崎の世界史の構想に対する詳細な論説であるが、実は、こういう構想は、前述の「東

38) 前掲宮崎市定『アジア史概説』続編、191-192頁。

39) 前掲宮崎市定『アジア史概説』続編、193頁。

洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」という論文の内容に基づくものである。その論文において、宮崎は世界史を構造的に把握するために東西交渉史の視点や成果を取り入れたとあってよいであろう。

3 宮崎の世界史構想における時勢論の性格

これまで宮崎における中国古代都市国家論の形成及びそれに基づく古代史の発展図式の構造を検討した。要するに学問の基盤が東洋史にあった宮崎は、京都大学の西洋史、西アジア史、東西交渉史の研究成果を中国史研究に取り入れ、中国一國史の枠組みを超えた世界史の次元で中国史研究を行ったのである。

しかしながら、世界史の次元で中国史を把握し、逆にそれをもって世界史を体系的に構築しようとした宮崎の動機については、マルクス唯物史観の影響がその要因になっているのではないかと思う。当時、京都帝国大学のアカデミズム実証主義歴史学と対置の位置にあったのはマルクス歴史学である。1932年、歴史学研究会が東京で設立されたが、「この研究グループの特徴は、日本史、東洋史、西洋史というような専門の区別を超え、歴史現象を世界史的にとらえること、また社会経済史および民衆史に関心を持った点にあると言える」⁴⁰⁾とする。京都帝国大学の東洋史学者を含めた実証主義歴史学者たちは、マルクス歴史学者と「皇國史観」を持つ歴史学者によって「無思想」、「無氣力」な史学であると批判された⁴¹⁾。歴研派のマルクス主義者たち、古代＝奴隸制、中世＝封建性、近世＝資本主義制という単線的発展ルートで西洋史をモデルとして抽出した図式で中国史を捉える「結論先行」の研究方法に対して、宮崎は敬遠の態度を貫いた。宮崎の世界史を構造的に把握しようとする動機は、マルクス主義や歴史哲学と異なる立場で世界歴史の「発展法則」を見つけようということである。晩年の宮崎は以下のように自分の心情を吐露したのである。

若し東西両洋の古代史の発展が、平行して行われ、重要な節目節目を同じように乗り越えてきたとすると、この平行現象の意味するものは何か。唯物史観や、歴史哲学のほうでは兎もすると、人類社会の発展には一定の歴史的必然的の法則があり、世界の各地域の住民は、遅かれ早かれ、定められた段階を上って発達していくように考えたがる。併しこのような天にまします造物主が予め敷設した軌道の上を走るのが歴史だとしたならば、そんな

40) 前掲谷川道雄編著『戦後日本の中国史論争』、10頁。

41) 永原慶二『20世紀日本の歴史学』、吉川弘文館、2003年、128頁。

ものは人類の歴史ではない。問題はそんなところにあるのではなく、平行現象を包む更に大きな環境は何かとすることである。それには我々が何とはなしに、如何なる理由もなく、只漠然と考えて、さも真理であるかの如く信じていた歴史観を、もう一度根底から考え直して再検討しなければならない。⁴²⁾

この意見より、宮崎における全人類的・汎地球的歴史の法則性を探究しようという意図が明確に見て取れる。そのような意図はマルクス唯物史観からの刺激を受けたと言えるが、マルクス唯物史観と異なる立場で世界史を構築しようとする意思でもあった。

しかし繰り返し述べるが、宮崎の中国古代史の研究に取られた研究方法は、世界史を体系的に把握するために、西洋史から抽出された「外部指標」をもって中国古代史に類似現象を求め比較史としての研究方法であった。これは、あらかじめ世界史を構築しようとの意図や構想を備え、証拠として存在する平行現象を中国史に求める、単なる後追いの研究方法に陥ってしまったようにも思える。

前述したように、宮崎は世界を文化先行地域と文化後進地域と分けて、後進地域の文化は、先行の文化による刺激を受けてより高度な文化に進化するという図式で、この三つの地域を序列化した。こういった考えは、まさに内藤湖南の「文化中心移動説」を想起させるであろう。

すでに見たように、世界史をヨーロッパ、東アジア、西アジアといった三つの地域に分けた結果、事実上、ヨーロッパと中国とを相対化して見ることになったのである。では、宮崎にそのような意図があったのか。宮崎の世界史発展の図式によれば、一番後進の地域は逆に先行する地域に刺激され、より有利な条件に恵まれることになる。そうすると、ルネサンスが遅く発生したヨーロッパが近世に入ったのも一番遅くなり、かえってその文化がヨーロッパ以外の二つ地域よりそれまでにない高度な段階に達することができたのである。宮崎の言葉を借りれば、「現今西洋世界が、他の世界の先頭に立ちつゝあることは、遺憾乍ら率直に之を承認せざるを得まい」⁴³⁾と云う。そして彼はさらに、次のように言っている。

併し乍ら之を以て直ちに、西洋人は独創力に富み、東洋人乃至西亜細亞人が然らずとするは早計である。西洋人がそれ程独創的なものならば、他の世界に於いて既に絢爛たる文化を有し進歩せる科学を有したる時代になつて了ふ迄、猶何時迄も長く未開な状態に愚図つ

42) 宮崎市定「私の中国古代史研究歴」(1985年)、『中国古代史論』、平凡社、1988年、328-329頁。

43) 前掲宮崎市定「東洋のルネサンスと西洋のルネサンス」(下)、93頁。

いてゐた筈がない。彼等こそ他の何れの世界よりも先んじて文化の華を開く可き筈でなかつたか。

すなわち宮崎においては、東アジア、西アジア、ヨーロッパとの三地域の文化の関係は、互いに孤立的、自己完結的歴史発展ではないことになる。言い換えれば、ここでヨーロッパ史を相対化し、一元的な「ヨーロッパ世界史」を否定する意図があると考えられる。

宮崎がこの論文を発表したのは日中戦争の最中の1941年である。ここでは、その当時の社会的・学術的雰囲気を検討してみたい。

1868年に開始した明治維新を皮切りとして日本は、ヨーロッパ近代文明にならって文明開化というスローガンを掲げた西洋化の路線を方針とした。これは、ヨーロッパの近代文明の先進性を意識し、その反面、自国の後進性を強く覚え、貪欲に西洋文化を吸収、移植した運動であった。当初は日本の伝統的文化が一時的に西洋の文化に圧倒されたかに見えるが、日本の国力の向上と伴って、明治二十年代になると「国粹主義」の形で西洋文化に強く反発する動きが現れた。伝統と近代との対置は、日本のアジアにおける自己認識にも繋がっていて、「興亜」と「脱亜」との対峙の主張が近代日本に並立し、絡み合っていたのである⁴⁴⁾。これについては、子安宣邦氏が明確に論じている。

近代国家日本によって主導される東アジアの政治秩序の再編成的な組み替えは1868年の明治維新とともに始まるとすれば、東アジアという広域圏を前提にした帝国日本による世界秩序の再編成の主張は1931年に始まる。十九世紀の中期に軍事力を背景に東アジアをヨーロッパの資本主義的システムに組み入れることによって近代の資本主義的な世界秩序は成立した。同時に東アジアは「世界史」の歴史過程に編入された。このヨーロッパ中心的な「世界史」とのかかわりにおける日本の歴史的転換期を私は1850年と、1930年と、そして1980年の三つの時期に見ている。(中略) 1930年という転換期の特色は、日本がみずからを中心的な指導的国家として東アジアを一つの広域圏に再編成し、ヨーロッパ中心の世界秩序の再編成を主張していくところにある。⁴⁵⁾

44) 竹内好が日本の近代史を、「思想の角度からみると、興亜と脱亜の絡み合いで進行し、最後に、脱亜が興亜を吸収する形で敗戦に行きついた」過程とし、「日本にとってアジアの意味が当初の連帯感から次第に支配の対象に変わった」と主張している。竹内好「日本人のアジア観」、『竹内好評論集』第三巻「日本とアジア」、筑摩書房、1966年、92頁。

45) 子安宣邦「大いなる他者—近代日本の中国像」、『環』第9号、2002年。「アジア」はどうかたられてき

子安氏の論ずる「1929年の世界恐慌の始まり、1931年の満州事変の勃発、そして1932年のナチ政権の成立という現代史の年表的事実をあげるまでもなく、1930年とは第二次世界大戦へと世界が方向付けられていった歴史の始まりを意味している」⁴⁶⁾という時代の風潮を背景に、1930年代に入ると、それまでのヨーロッパ主導の世界の秩序に対し、日本が積極的にそれを再編成する要求を出したのである。

実にそれは、西洋＝近代を超克しようというような論調と一つの「課題」の二つの側面を構成している。「東アジアの権益圏を確保しながら「世界秩序」の再編成を世界に対して要求していく昭和期日本の自己主張に、「世界史」の再認識を通じてもっとも明確な哲学的な表現を与えていったのは、いわゆる京都学派の「世界史の哲学」あるいは「世界史的立場」であった⁴⁷⁾と子安氏が指摘した通り、「西田幾多郎の影響下に集まる京都学派の若い哲学者や歴史家たちによって「世界史」の再認識と「世界秩序」の再構成の哲学的言説化⁴⁸⁾が進められていく座談会が開かれた。この座談会に参加したメンバーには、高坂正顕、西谷啓治、高山岩男、鈴木成高などが名前を連ねる。その中で京大西洋史の先生たる鈴木成高⁴⁹⁾以外は、全部京大出身の哲学者である。1941年から1942年にかけて、「世界史的立場と日本」(1941年11月26日)、「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」(1942年3月4日)、「総力戦の哲学」(1942年11月24日)の三回にわたる座談会を開いたのである。⁵⁰⁾この三回の座談会の内容を一つの本にまとめ、『世界史的立場と日本』として中央公論社によって出版されたのは、1943年のことであった⁵¹⁾。

すでに指摘されたように、「三回の座談会において四人の討論者に通底している問題意識は「世界史とそこに於ける日本の主体的位置」の問題であり、それを言い換えれば「世界史的日本の立場」の問題⁵²⁾であり、「彼らの共通認識は、今次の大戦は文化、思想、国家、経済その他

たか—近代日本のオリエンタリズム—』所収、藤原書店、2003年、160-161頁。

46) 子安宣邦「『世界史』とアジアと日本」、『環』第1号、2000年。前掲子安宣邦『「アジア」はどうかたられてきたか—近代日本のオリエンタリズム—』、31頁。

47) 前掲子安宣邦『「アジア」はどうかたられてきたか—近代日本のオリエンタリズム—』、第32頁。

48) 前掲子安宣邦『「アジア」はどうかたられてきたか—近代日本のオリエンタリズム—』、第32頁。

49) 粕谷一希氏によれば、「生涯お互いが知己として認めあったといわれる鈴木成高と宮崎市定である」という。粕谷一希『内藤湖南への旅』、藤原書店、2011年、241頁。しかし、氏のそういった根拠が明言されていなく、不明である。

50) 吉田傑俊『京都学派』の哲学—西田・三木清・戸坂を中心に—、大月書店、2011年、287頁。

51) 高坂正顕、西谷啓治、高山岩男、鈴木成高『世界史的立場と日本』、中央公論社、1943年、序。

52) 小坂国継「世界史の転換と現代日本」、『高山岩男著作集』第四巻「世界史の哲学」の解題、玉川大学出版部、2008年、715頁。

のすべてのものの転換を要求する転換戦であり、近代の超克のための戦い⁵³⁾である。この座談会は、「ほぼ同時期に『文学界』誌上で展開されたもう一つの座談会「近代の超克」と共通する要素が多い⁵⁴⁾ものである。

要するに、当時の京都学派の学者たちのみならず、知識人の多くは、ヨーロッパが主導する国際秩序に反対し、「新しい世界秩序」の可能性を理論的に構築するという、当時の時局に向けた性格を帯びて討論などを行った。いわゆる「新しい世界秩序」とは、日本の中国を含めたアジア各国への支配権を理論的に合理化させるものにほかならない。

換言すれば、そのような理論には二つの側面がある。一つは、当時の西洋主導の国際秩序を不合理とし、つまり国際秩序の現実に不満を抱きそれを再編成しようとする面である。いま一つは、日本のアジアへの支配を合理化させるために、日本がその資格を有するアジアの中の唯一の国であることを論証することである。すなわち、当時の世界における日本の位置づけが問われていた。実は宮崎の世界史構想にもそのような意図が見てとれる。前述のように、文化が後出すればするほど、より有利な条件に恵まれるという「原則」を宮崎は繰り返し強調したのである。彼はさらに以下のように述べている。

ペルシャ・イスラム世界と東洋と、西洋との三つの世界は、「アラビア夜話」に出て来る三人の王子である。大抵の場合に於いて第二王子は第一王子に勝り、第三王子は第二王子に優れて最後の栄冠を贏ち得るといふ話の筋である。只夜話と歴史と異なる所は、夜話は完結してつたが、歴史は未だ完結してゐない。更に第四王子が現れて来るかも知れず、或は今迄の歴史は全世界の歴史に対してほんの序の口に過ぎないで、西洋世界が実は第一王子に相当するのであつたかも知れないのである。⁵⁵⁾

つまり、歴史が完結しないのであれば、現在の西洋の優位を永久に保持していくことができないだろうと宮崎は論じている。そればかりでなく、現在のヨーロッパの優れた文化は、西アジアと東アジアの刺激から生まれたものである。こうして見ていくと、ヨーロッパの刺激を受

53) 前掲『高山岩男著作集』第四巻「世界史の哲学」の解題、玉川大学出版部、2008年、715頁。

54) 前掲『高山岩男著作集』第四巻。また、竹内好氏によると「近代の超克」と並んで同じ頃、もう一つ「悪名高き」座談会があった。西田幾太郎と田辺元に師事するいわゆる京都学派の四人の哲学者、歴史家によって行われたもので、1941年から1942年にかけて前後三回『中央公論』に掲載され、これも後に最初の座談会の名をとって『世界史の立場と日本』として出版されたという。竹内好「近代の超克」、前掲『竹内好評論集』第三巻「日本とアジア」、143頁。

55) 前掲宮崎市定「東洋のルネサンスと西洋のルネサンス」(下)、第92-93頁。

けた日本、あるいは西洋文化を積極的に吸収して近代化した日本をどう位置づけるべきかが問題となる。

換言すれば、世界文化の中心はまず西アジアにあった。のちに東アジアの中国に移動し、現在はヨーロッパにあるが、これからはどこに移るか。それは宮崎が明言していない。しかし彼の世界史構想は結局「世界史的立場」の学者たちと共通しているのではないだろうか。

つまり、現在の西洋＝近代を超えた日本文明が主導する新しい世界秩序が次に来るというのが、宮崎の世界史構想の時勢論の性格であった。実は、すでにふれたように、1940年に出された『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』という本のなかで、日本は、素朴の精神を保持しながら、中国の科学に対する無興味と違って、西洋の科学を取り入れ、「わが国民は、科学の移植に成功し、文明生活と素朴主義とを如何にして調和せしむべきかの鍵を握るに至った」⁵⁶⁾と論じている。

これは中国の伝統を克服し、西洋文明の優れた点を吸収した日本が、西洋＝近代を超越しているという論調である。日本のアジアへの侵略を合理化させるために、当時の学者たちは、中国を含めたアジアの停滞性を強調し、日本文化の独自性を強く主張した。1940年から日本敗戦まで、宮崎もそのような主張を持ち続けたのである。例えば、1943年に『京都帝国大学新聞』に二回連載された「日本的体制と中国的体制」にそれが表明されている。この論文において、日中の体制を振り返りながら比較した宮崎は、中国の体制が克服すべきものであるのに対し、日本の体制は優れていると論じた。

以上のように、1943年に発表されたこの論文から、日本の独自性を強く強調する「皇国史観」や、「大東亜共栄圏」の理念などの戦時中における戦争を合理化させるイデオロギー的理論と共通した部分が見て取れる。この論文はのちに、他の何篇かの論文と共に1943年に星野書店によって出版された『日出ずる国と日暮るる処』に収録された。この本に対して、宮崎は「もっとも此の書が成ったのは大戦中のことであり、今から読み返すと、当時の私の著述の意図の中に、皇威発揚の意味が多分にあったことは否定できない」⁵⁷⁾と回想したことがある。

実は、こういう「皇威発揚」の論調は、1940年に既にその端緒が見られたのである。換言すれば、1940年に提出したその世界史に対する構想が、当時の国際的現実と関わっていると言ってよいであろう。ここで注意すべきは、1940年の論説には、時局向けの特徴が見られるが、1943年のものほど露骨ではなかったことである。これは1941年太平洋戦争の勃発に伴い戦争の事態

56) 宮崎市定『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』、『アジア史論考』(上)所収、朝日新聞社、1976年、126頁。

57) 前掲『アジア史論考』(上)、6頁。

が拡大していくとともに、日本学界における「大東亜共栄圏」に対する理論的構築が盛んに行われたことと無関係ではないであろう。

もう一つ見落とすことのできない原因がある。それは、前述の京都学派の学者たちと海軍の招請を受けて行った会合である。大橋良介氏によれば、その会合は次のようなものである。

昭和十七年（一九四二年）二月から二十年七月にかけて、つまりは太平洋戦争のほぼ全期間を通じて、「京都学派」の哲学者たちを中心とする京都大学の学者グループが、海軍の一部（米内光政系）の要請と協力を受けて月に一、二度、時局を論ずるひそかな会合を重ねていた。⁵⁸⁾

また、その会合の議論のテーマについて、「国内・国外の思想的な状況や歴史的背景の分析、時代の展望、戦争の理念の模索と国策是正の助言、のちには東条英機内閣の打倒を含めた戦争終結の展望、そして戦争末期には敗戦を見越しての国民意識の問題、等々」⁵⁹⁾であったと大橋氏は紹介したのである。この会合は、前後18回あって、第三回、第五回、第六回と第十三回合わせて四回の会合に宮崎は欠席し、前後14回に出席したのである。そして、その会合に参加したのは、京都学派の学者が主であるが、その「会合の常連メンバーは高山岩男、高坂正顕、西谷啓治、木村素衛、鈴木成高、宮崎市定、日高第四郎。京都学派の内部で西田幾多郎に次ぐ位置にあった田辺元、海軍調査課の高木惣吉大佐なども、時おり出席している。グループのゲストとしては、後年ノーベル賞を受賞した物理学の湯川秀樹や、戦後は唯物論に転向したが当時は西田哲学に接近していた柳田謙十郎、東京からのゲストとして谷川哲三や大熊信行が出席することもあった」⁶⁰⁾のである。

以上からわかるように、宮崎は京都学派の哲学者や西洋史の鈴木と密接な関係を持っていた。1942年2月12日に行われた第一回会合の論題は、「共栄圏なる言葉の検討」、「共栄圏の二大分類としての南方と支那」、「対支、対南方政策とその思想的根拠」、「対外政策と対内問題は根本的に対応」、「大東亜圏に於ける日本の指導の理念について」などがあるように、すべてが時局と深く関わるテーマであった。

要するに1940年前後の宮崎の研究は、それまでの中国本土に関心を払う実証的研究と異なり、当時の学界の影響をうけ西アジア史への関心が強くなり、さらに世界史の構築を試みた。その

58) 大橋良介『京都学派と日本海軍—新史料「大島メモ」をめぐって—』、PHP新書、2001年、12頁。

59) 前掲『京都学派と日本海軍—新史料「大島メモ」をめぐって—』、14頁。

60) 前掲『京都学派と日本海軍—新史料「大島メモ」をめぐって—』、13頁。

時点の宮崎の世界史研究の中には、すでに時局論の性格が見られるが、露骨にそれを表明したのは、1942年以降のことであり、その会合への参加からの影響を無視できないと考える。

おわりに

本論では上記のように宮崎市定の世界史構想の形成過程を振り返った。

その構想は学術的な性格が強いとはいえ、当時の「世界史的立場」を主張する京都学派の哲学者たちのイデオロギーを込めた言説と共通する部分も見落とすことができない。そもそも宮崎の世界史構想は、西アジアの文化を最古文化とし、その文化が後進する東アジアやヨーロッパに刺激を与え、その刺激を受けた後進地域の文化がさらに発展し、西アジアを凌ぐこととなるというものである。これはヨーロッパと東アジアとの間でも、東アジアと西アジアとの文化関係と同じ過程をたどると考えた。すなわち、先進が後進に刺激を与え、後進が先進を凌ぐ、という図式である。このような図式を通して、一元的「ヨーロッパ世界史」を否定する意図があると考えられる。それについて、宮崎は1957年に発表した「西アジア文化の古さについて」において、以下のように吐露した。

世界各地の古代文化の中で、西アジアの文化が最も古い起原をもつことは、現今一般に信ぜられていて異論がないようである。(中略) またメソポタミアとエジプトとで、何方が古いかということになると議論が分れる。そして、どれだけ古いかという問題は、同時に文化一元論か、多元論かという問題にも関連してくる。例えば西アジアの文化の起原が、中国文化のそれに比して著しく古いとなれば、具体的な証拠の裏付けがなくても、西アジア文化の影響によつて中国文化が発生したであろうことが、十分に推測せしめられるからである。⁶¹⁾

この論からみれば、一元的な「ヨーロッパ世界史」に対して、宮崎は否定の態度を取り、その代わりに一元的な「西アジア世界史」を打ち出したと思われる。ただこれは、ヨーロッパ主導の世界史への否定や、日本が新しい世界の中心となることなどの点において、京都学派の「世界史的立場」と共通している面もあろう。

また、宮崎の世界史の構想においては、ヨーロッパ中心史を相対化し、ヨーロッパ史の普遍

61) 宮崎市定「西アジア文化の古さについて」、『西南アジア研究』創刊号、1957年11月、2頁。のちに、『宮崎市定全集』第20巻所収。

性を否定しようとした意図が見て取れるが、一方で彼がヨーロッパから抽出された事象を基準として他の二つの地域を捉えた研究方法にも注意すべきであろう。言い換えれば、それまでの「ヨーロッパ世界史」であろうと、宮崎の「西アジア世界史」であろうと、一元論的性格は変わらない⁶²⁾。さらにいうと、前述の二種類の世界史の発展においては、「都市国家」や「ルネサンス」というような過程を経なければならぬのみならず、最終的に近代に到達しなければならない。これは、1960年代にアメリカから日本に伝わった「近代化論」を想起させる。つまり、宮崎の歴史観の根底には、近代主義の立場が見て取れるのではないであろうか。

もう一つ注意しなければならない点がある。世界史を構造的に把握しようとした宮崎は、比較史の方法を取り入れ、また世界各地における交通の役割を重要視した。しかしながらこれまでの論述において取り上げられたのは、絵画というような文化の面の事象のみである。そういう「弱点」を意識した宮崎は、戦後繰り返し彼の提出した世界史構想と時代区分論を論じており、特に社会経済史の面からかれの世界史構想と時代区分論を補足した。1963年の定年退官前後の宮崎は、「景気史観」という史観を打ち出し、それを以って中国史を捉え、さらにその世界史観を体系化させたのである。

見過ごせないことは、宮崎における交渉の視点を取り入れた世界史構想は、当時の日本学界に大きな影響を及ぼした文化人類学からの影響がうかがえることである。ただ、この問題の詳細については今後検討を行いたい。さらに加え、戦後における宮崎の世界史構想の変化を見つ、彼の中国史研究が、いかにその世界史構想によって規定されてきたかを今後の研究課題としたい。

62) 竹内好が文化一元観について、こう論じたことがある。「文化一元観というのは、歴史は未開から文明への一方交通だという歴史観を軸にして世界を解釈する思想のことである。文明とは、ある本源的な力であり、定冠詞つきで呼ばれるべきものである。その文明が野蛮へ向って滲透する自己運動の軌跡が歴史である。文明の内容は、論者によって、また時期によって一様でないが、それが物質であるにせよ精神であるにせよ、ともかく野蛮への光被によって自己貫徹せざるをえない根本のある何ものである。万物を化育する太陽のようなものである。文明こそすべてである。」(竹内好「日本とアジア」、『竹内好評論集』第三巻、筑摩書房、1966年、232頁。)